
大阪は今日も平和です。

梨音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪は今日も平和です。

【Nコード】

N8595W

【作者名】

梨音

【あらすじ】

平和にオリキャラ達が絡みます。基本は短編ですが、話自体は繋がってます。偶にオリキャラメインの話も。タイトルの通り大阪中心ですが、東京のコナン達も登場します。

オリキャラ紹介（前書き）

登場するオリキャラの紹介です。

オリキャラ紹介

七瀬 香織

中3の秋に改方学園へ転校してきて、それ以来平次や和葉とはクラスが同じに。

彼女独自の情報網が存在し、犯罪組織からクラスメイトに至るまで、様々な情報を集めている。

高校生になってからは自らを“情報屋”と称し、和葉には内緒で平次に時々情報を提供・事件解決に協力している。

飄々としていて掴み所のない性格。

和葉の恋を友人としては応援しているが基本は傍観で、あくまで中立の立場を貫いている（と本人は思っている）。

小川 孝太郎

平次や和葉とは小学校からの付き合いで、ずっとクラスが同じ。

剣道部員で腕はそこそこ。

見た目はそれなりに整っているのだが、平次の存在が強すぎて引き立て役になりがち。

周囲の個性の強い人達や己の性格ゆえか、貧乏くじを引きやすい。

大抵の事は苦笑で流すが、本気で怒ると一番怖い。

昔から平次と和葉を近くで見ている、曖昧なその関係にやきもきしている。

三谷 優子

平次や和葉とは中等部からの付き合いなのだが、高等部ではクラスが離れてしまった。

合気道部員で、和葉とはそれで仲良くなった。

何事にも積極的にこなすが猪突猛進で暴走する事も。

ただし基本は常識人。

和葉激ラブで、事ある毎に平次と和葉の関係を縮めようと画策している。

ただし詰めが甘く、成功した事はほとんどない。

長谷部 翔

平次や和葉の1コ下で後輩にあたる。

剣道部員で平次に次ぐ実力。

中性的な顔立ちで童顔。

人当たりは良いが毒舌家で、考えが読めない。

平次と和葉を観察するのが大好きで、二人をよくからかったりする。

西園寺 真莉亜

高2の時、平次や和葉のクラスに転校してきた。

西園寺財閥のお嬢様。

頭は良いはずなのだがどこか抜けている。

普段は猫を被っているが実は高飛車。

平次に一目惚れし、いつも隣にいる和葉が気に入らない。

事ある毎に平次と和葉の中を邪魔するのだが、いつも失敗している。

オリキャラ紹介（後書き）

中々にクセのあるキャラ達ですが、よろしく願います。

朝の風景（前書き）

改方学園の一日はこうして始まる。

朝の風景

今日も二人の怒声が教室に響き渡る。

「平次のアホ——ッ！」

「何やとボケエ！」

改方学園きつての名物夫婦による痴話喧嘩。
はてさて一体、今日は何があつたのやら……。

「……で、今日は何で喧嘩しとるん？」

「それを今説明しようと思ってたんだけど」

「……………誰に!？」

「まあ、誰でも良いじゃない」

皆さん初めまして。

私は名物夫婦——もとい、遠山和葉&服部平次の幼馴染コンビ——
のクラスメイト、七瀬香織。

私に話し掛けてきたのは二人とは小学校からの付き合いだという、
同じくクラスメイトの小川孝太郎。

顔立ちはそれなりに整つてると思うんだけど、服部の存在ゆえにあまり目立たない——所謂、引き立て役って言うのかな？

まあ、そんな感じの男だ。

……頑張れ、小川君。

「……お前、何や失礼な事考えてへんか？」

「小川君、エスパー？」

「否定せんのかいつ！」

「そんな細かい事、どーでもいいじゃない。それより今はあつちでしょ」

二人を指差すと「どーでもええって……」と小川君は文句を言いつつ、そちらへと視線を向ける。

どうやら和葉と服部の痴話の付く喧嘩はある程度収まったようだ。

「あーあ、終わっちゃった」

「……で、結局今日は何が原因やったん？」

「静華さんに頼まれて、和葉が中々下りてこない服部を呼びに部屋へ入ったら、服部が上半身裸だったんだと」

「……ホンマ、あいつらも飽きんなあ」

「同感」

毎朝毎朝、よくまあ喧嘩のネタがあるもんだ。
だけど……。

「でも、二人の喧嘩が無いと一日が始まらないし……」

「ああ。……慣れって、怖いな」

しみじみと語る私達の所へ二人仲良く(?) やって来るまで、あと
数秒。

朝の風景（後書き）

日常編、またの名をオリキャラ紹介編です（笑）

女子会！（前書き）

和葉・香織・優子の華やか（？）なガールズトーク。

女子会！

「……で、この前の夫婦旅行はどうだった？」

「！？ふ、夫婦って、アタシらはただの……っ！」

優子の言葉に和葉は顔を真っ赤にしながら反論する。

ちなみに優子の言う“夫婦旅行”とは、先日平次に届いた依頼に和葉が付いて行った時の事を指している。

香織は二人の様子を、パンを食べつつ傍観していた。
すると……。

「香織っっ！」

和葉が香織に抱きつき、助けを求めてきた。

泣きついてきた和葉の頭を撫で、軽く優子を諷める。

「優子、あんまり和葉をかわらないの」

「だってー、和葉の反応が可愛えからつい」

一般より背が低く、中学生にしか見えない香織が二人を宥めている様は何ともアンバランスな感じがするのだが、クラスメイト達にと

つては最早日常の光景になってしまっているため、誰も気にしてはいなかった。

……ただ一人を除いて。

「……」

香織の背中にチクチクと刺さる視線。

香織は二人に気付かれぬよう溜息を吐くと、心中で毒づく。

（まったく。女の私にまで妬くとか……あの色黒男め）

しかもその当の本人は無自覚でやってのけるのだから性質が悪い。

「和葉……」

「ん？」

「ちょっと、相手考えたほうがいいかも」

「!？」

香織の言葉の裏には「あんな独占欲の強い男、あとで絶対苦労するって」という思いが隠されているのだが、当然和葉に伝わるはずもなく。

「……」

「じ、冗談！冗談だから、ね？」

「……香織っっ」

「ちょっ！」

己の言葉足らず故の失言を慌てて否定すると、何故かぎゅっぎゅうに抱き締められる香織。

「あー！ウチもっ」

「！？」

いつの間にか一人蚊帳の外状態だった優子が、我慢出来なくなっただのか、二人を抱え込むようにして輪に加わり、一番下の香織へと一気に体重がかかる。

「~~~~っ！」

押し退けようにも力の差は歴然としていて。

結果、和葉と優子の気が済むまでこの状態を強いられる事になる香織だった……。

女子会！（後書き）

トークじゃなくてスキンシップだね、これ
↑
和葉はスキンシップとか好きそう。

女子のイチヤイチヤは大好きです。

男子会？（前書き）

一方、平次・孝太郎・他男子生徒達は……。

男子会？

孝太郎及び他男子生徒達は困っていた。

……というよりも、恐怖を感じていた、の方が正しいだろう。
原因は言わずもがな、西の高校生探偵である服部平次だ。
彼はある一点を凄いい形相で睨んでいた。

（服部……その目怖えよ！）

平次の視線の先には、和葉に抱きつかれている香織の姿。
早い話が香織への嫉妬だ。

しかも無自覚という傍迷惑なオマケ付きで。

（七瀬スゲーよな。あの視線を受けても平然としとるんやで？）

（女にも嫉妬とか、服部マジヤベーよ）

（まだ女やし、睨まれるだけマシやろ。俺らやったら確実に半殺し
決定や）

（“半”で済むとええけどな……）

（つか今日はいつにも増して嫉妬深ないか？）

（確かに。よお考えたら、普段はこんなんであんま嫉妬せーへんよ
な）

そんな会話が小声でされているとは全く知らない平次は相変わらず睨みっぱなしで。

孝太郎は意を決して平次に話しかけた。

「……服部」

「あ？」

「お前なー、七瀬睨んどつてもしやーないやろ」

（お！小川勇者やつ）

（つか、やっぱりアイツ七瀬の事……——）

（何を今更）

（……え、マジやったん！？）

（これ、俺らの間じゃ有名な話やぞ）

後ろで好き勝手に小声で話すクラスメイト達に（こいつら後で……っ！）と一人決意する孝太郎。
もちろんそのような裏事情を知らない平次は、不機嫌そうにそっぽを向いて呟いた。

「別に、睨んでへんわ」

ギロリと鋭い目を孝太郎に向ける。

普通の人間ならば完全に怯んでしまつてあろうその視線は、長年つるんできた孝太郎には効果は薄かった。

孝太郎はさらに言葉を重ねる。

「じゃあ、何で今日はそんなに不機嫌なんや」

「……」

「はつと……」

その瞬間鳴る予鈴のチャイム。

結局服部への尋問は失敗に終わってしまった。

実は部活の時に服部の“普段以上に嫉妬深かった”理由が判明するのだが、この時はまだ、誰も知らない……。――。

男子会？（後書き）

ガールズトークの対として、男子だし下ネタとか（女子達の）品定め的な会話も考えてたのですが、結局は平次の嫉妬という無難な話に。

しかし女の子に嫉妬はさすがにないだろ、と書いてて思いました。

部活 i n 剣道部（前書き）

平次の嫉妬の理由が判明。

部活 in 剣道部

「ひいゝゝゝっ」

道場内に響き渡る悲鳴。

周りを見渡せばあちこちで倒れとる部員達。

……まさに地獄絵図とはこの事やな。

一人道場の隅で納得すると、一人の後輩が近付いてきた。

「いつにも増して荒れてますね、先輩」

そう言つて後輩——長谷部翔は、普段と変わらない笑みを浮かべていた。

「……長谷部、さっきまでアイツと稽古してたよな」

「ええ。でもあんな先輩、まともに相手しとつたら命がいくつあつても足らんで逃げてきました」

……確かにな。

今の服部には関わらんほうがええ。

何せこんな惨状をつくつといて、まだやる気やし。

「……で、服部先輩、今日はどうしたんです?」

「ん?それが俺らにも分からんや。昼休みも七瀬相手に嫉妬しとつたし……」

「七瀬先輩にも?」

「ああ」

「オレ知つとるで。アイツが不機嫌な理由」

「部長!」

突然会話に入ってきたんは剣道部部长。

それより何より、言葉の内容の方が気になった。

「!何なんです!?!」

「まー、とりあえず落ち着けや」

「外で話そう」と出口を指す部長に、俺らは無言で従った。

「……で、原因は?」

翌日の教室。

俺は部活で得た情報をクラスメイト達に伝えた。
ちなみに服部と遠山はまだ登校してない。

「昨日は遠山へ告白する相手が、後を絶たんかったんやて」

そろもつ朝の登校時から、先輩後輩関係無しに。

……おそらくは昨日、服部が朝練で別々に登校しとったんせいもあるんやけどな。

「告白するんは勝手やけど、こっちの迷惑も考えてほしいわな」

誰かが呟いた言葉に、一同が頷く。

「確かに。……告白した奴らは失恋のショックだけで済むけどな、その事実を知った服部の怒りを受け止めるんは俺らなんやぞ」

そつ愚痴ると肩を叩かれる。

「諦めろ。それが同じクラスになった俺らの宿命や」

「早くあの二人くつつきやええのに……」と一同の思いが一つにな
った事はあの二人には内緒や。

部活 i n 剣道部（後書き）

真相なんてそんなもんです。

だがしかし、部活シーンが思った以上に少なかった。

これでこの章は一応終了。

次回からはがつつり平和書くぞー！。

お約束？（前書き）

まあ、やっぱりな展開……？

お約束？

「これがこくら辺の地域で祀られとる神さんの祠や」

「伝説もあるんだけど、それによるとこの神様、元は人魚で、その人魚の魂を鎮めるために建てられたらしいわ」

「で、その伝説に因んで今は健康長寿の神様って呼ばれとるんや」

「……あのーお二人さん」

「ん？」と同時に振り返る平次と香織。

「どないしたん孝太郎」

「もしかして伝説の話も聞きたいの？でもこれ結構長いわよ」

「そーやなくてっ！」

キョトンとする二人に孝太郎は思わず声を荒げる。
和葉はそんな孝太郎を静めると、困ったように。

「どうして二人とも、そんなに早いん？」

とある温泉街に改方学園2年一同は修学旅行へ来ていた。

日程は二泊三日。

一日目、二日目は班行動で、三日目はクラス単位での行動となっている。

平次・和葉・香織・孝太郎の四人は同じ班になったため一緒に移動しているのだが……。

「やって、さつさとやる事やって自由時間にしたいやん」

「そーそー。“不測の事態”も考えて、さ」

「そ、そうだけど……」

「つーか何やねん。その“不測の事態”て」

班行動では学校が指定した場所をいくつか回る事が課題としてあるのだが、平次と香織はその場所をかなりのハイペースで回っているのだ。

しかも分かりやすい解説付きで。

不思議な事に二人の手にガイドブックは一切見当たらない。

「ここは温泉街。そしてこの班には死神……じゃない、探偵さん。何が起きてもおかしくないからね。一応、課題はやつとかないと怒られるし」

「ま、まあ確かに……」

香織の言い分に思わず納得してしまう和葉と孝太郎。

一方の平次は惘然とした表情で「オレが事件を呼んでんとちゃう。事件がオレを呼んでんのか」と呟いていたのだが、三人はそれを完全に無視。

「それに、面倒な事はさっさと終わらせて、自由時間を多くした方が楽しめるでしょ？」

「……それもそうやね」

「よしっ、じゃあ残りもさっさと回るか」

やる気になった和葉達とは正反対に、不機嫌そうにそっぽを向く平次。

「ほら行くで、平次！」

「痛っ！？和葉ア！」

「ふーんだ」

「！この……っ」

「ひゃ！？ひゃにふんねんへえひ！（ひゃ！？何すんねん平次！）」

「おー。よく伸びる頬やなー」

いきなり二人だけの世界になった平次と和葉に、香織達は呆れる。

「……ハイそこー、イチヤイチヤしないで早く行くよー」

「イチヤイチヤなんしてへんわ！」

「ハイハイ」

「……同時に言っても説得力なくて、ええ加減学習せえよ……」

かくして四人は残りの指定場所を効率よく回っていった。
そして……。

「よっしゃ、ここで終わり……と」

「これでは自由時間やなー」

安心したその瞬間、辺りに響き渡るパトカーのサイレン。
三人の脳内に“不測の事態”という言葉がリフレインする。

「服部……」

「平次……」

三人が平次を見ると案の定、すっかり探偵モードになっている。

「……よっしゃ、オレらも行くで！」

「ええ——っ!？」

三人の悲鳴が街中に空しく木霊した……。

お約束？（後書き）

やっぱり事件からは逃れられない（笑）

最初は温泉街ということで湯けむり殺人事件も考えてたんですが、修学旅行中に血みどろもあれだし、トリックを考えるのが面倒なのであえなく別路線に。

その代わり糖度は増しかも？

とりあえず入浴シーンは絶対入れたいですね。

束の間の平和（前書き）

そんなこんなで一日目終了。

束の間の平和

「まさかホントに潰れるとは……」

「ホンマやねえ……」

和葉と香織は同時に溜息を吐く。
それもそのはず。

あの後平次が事件に首を突っ込んだため、辛うじて夕食前にはホテルへ戻れたのだが、折角出来た自由時間は全部潰れてしまったのだ。

「でも課題はもう終わらせたし……明日は丸一日使えるから」

「それだけが救いやなあ」

ぶくぶくと口まで温泉に浸かる和葉。
その顔は憂いに満ちている。

「明日こそは何もないとええけど……」

「それは……難しいかも」

「犯人もこんな時くらい、大人しゅうしてくれとったらええのに」

「……やけに実感こもってるね」

「まあ、幼馴染やし？似たような事はぎょーさんあるわ」

何と返せばいいのが困って香織が空を見上げると、夜空は憎らしい位に満天の星空で。

オマケに今日は満月らしい。

(どつりで明るくなって思ったら……)

香織が一人物思いに耽っていると……。

「……ま、今ぐだぐだ考えてもしゃーないしつ。そんな時はそんな時や」
「！」

「……立ち直り早っ」

「まあね。思い悩むんはアタシの性分やないし！とりあえずお風呂出て、平次達と卓球でもやらへん？」

「い、いいけど……」

「よしっ、決定！」

そう言って勢い良く露天風呂から出る和葉。

女性らしい身体のライン

水滴が流れる白い肌

水気を含んだ艶やかな黒髪と赤みを帯びた頬

それらが月の光に照らされて……。

（わ……）

その姿に思わず香織は息を呑んだ。

「……香織？」

「やっぱり綺麗だなあ、和葉」

「へ！？」

突然の香織の言葉に、和葉はさらに顔を真っ赤にする。

「細いのに出るトコ出てるし。かといって肉感的すぎないし」

「！？！？」

和葉にはもう何が何やら。

頬はおろか、耳や首筋まで真っ赤だった。

（あっちゃー、言いすぎた？）

香織も風呂から出ると和葉の腕を引く。

「ホント和葉は可愛いなあ」

和葉は俯いて香織のされるがままになっている。

「……早く中に入る？湯冷めしちゃう」

こくりと無言で頷く和葉。

浴衣を着終えた頃、ようやく和葉の頬の赤みも収まっていた。

「あ、ちょうど良かった」

和葉と香織が女湯から出ると、ほぼ同時に男湯から出る平次と孝太郎に出くわした。

「お、七瀬に遠山やん」

「なあなあ二人とも、卓球やらへんか？」

和葉の誘いに平次は少しだけ嫌な顔をする。

「今からか？風呂入ったばっかやん」

「ええやん、また入れば。……やつぱ、駄目？」

「う……っ」

上目遣いでお願いされうろたえる平次。
さらに香織の言葉が平次を追い詰める。

「付き合ってくれてもいいんじゃない？今日はアンタの推理に付き
合っただから、これくらい」

天使と悪魔のW攻撃に平次はあえなく撃沈。
残る孝太郎の答えも、もちろんOKだ。

「よしっ、じゃあ遊戯室に行こうか」

そして一行は卓球台のある遊戯室へと向かった。

「どこで間違ったんやろ」

「さあねー」

孝太郎と香織は和やかに会話をしながらラリーを続ける。
二人はまさに“温泉卓球”を楽しんでいた。
一方の平次・和葉ペアは……。

「はあっ!!」

「は、やるな和葉っ」

「舐めんといてっ」

「……あれはもう温泉でやる卓球のレベルやないで」

「二人とも目が本気^{マジ}……」

平次達はまさに、試合といってもおかしくないほどの盛り上がりを見せていた。

二人とも額から汗が噴き出し、浴衣もはだけている。

「あ……」

「どしたん？七瀬」

「小川君は、和葉見ちゃ駄目」

「え？」

まさかヤキモチか何かか？と少しだけ期待する孝太郎。
しかしそんな訳もなく、あっさりとその期待を香織は打ち砕く。

「多分見たら、服部に殺^やられると思うよ」

「へ……？」

「今の和葉、中々に色っぽいしー」

和葉本人は気づいて無いが、胸元ははだけ、太腿は見事に露わになっている。
おまけに汗をかいているとなれば色気はさらに増した。

これをまともに見たと平次にばれた日には、無自覚の嫉妬に巻き込まれる事は想像に難くない。

「は、はは……」

その考えによろやくいきついた孝太郎は、すぐに視線を二人から逸らす。

「……さて、そろそろ終わりにする？」

香織の言葉で三人が時計を見ると、風呂場を出てから随分時間が経っている。

「まだ決着ついてへんのやけど……」

まだまだ遊び足りないらしい平次。
最初渋っていたのが嘘のようだ。

「でも後1時間で就寝時間だし、その前に汗流したいでしょ？」

「う、うん……」

和葉も渋々といった様子で頷く。
それを合図に一行は遊戯室を出て、温泉へと再び入った。

束の間の平和（後書き）

今回は温泉ならではのシーンを書いてみました。

念願の温泉シーンを書けたので満足です。

絶対和葉ちゃんはスタイルいいと思うの（沖縄編扉絵参照で）。

そして卓球時の浴衣はだけ和葉ちゃん、おそらく平次は一切気付いてません。

卓球に夢中で。

多分寝る直前後悔したかと思われます。

そして隣の孝太郎に結局やつあたり。

サブタイの通り、二日目はさらに大波乱……の予定です。

気まずい雰囲気（前書き）

「あの七瀬がキレた……」 by 孝太郎

気まずい雰囲気

平次達四人は昨日とは正反対の場所を回っていた。途中、突然和葉がある土産屋の前で止まる。

「これええなあ」

「どうしたの、和葉」

「この簪、可愛えと思わへん？」

和葉が指したのは店先に展示された簪だった。桜をイメージとしたらしいそれは、シンプルながらも色合いが凄く綺麗で。

「確かに、可愛いね」

「どうしょ……、値段もお手頃やし、買おうかな」

「和葉ー、七瀬ー、置いてくでー！」

和葉がその簪に手を伸ばそうとしたとき、数メートルから二人を呼ぶ平次の声。

和葉は伸ばした手を引っ込めると、平次達の元へと向かおうとする。

それを慌てて香織が止めた。

「和葉、簪買わなくていいの？これ買うぐらい、服部も待ってくれるでしょ」

「うん。でも後でまたここ通るし」

和葉は香織の腕を引き、早足で平次と孝太郎に追いつく。

「何や、欲しいモンでもあつたんか？」

「ん。けどまだ買おうかちよお迷ったから」

「さよか」

そして散策を再開する四人。

この時はまだ何事もなく平和だった。

そう、この時はまだ……。

「どうして、こうなるの……っ！」

「ま、まあ……落ち着き？七瀬」

「これが落ち着いていられるか！」

普段は冷静な香織が、珍しく声を荒げる。
孝太郎はそれを必死に宥めていた。

鳩達も羽根を休める、昼下がりの大きな広場の一角で。

「そうなんです、まめいど豆井戸さん」

「ええ」

ベンチに座り、年上の男性とにこやかに会話する和葉。
そして……。

「……」

「ね、服部くうくん」

「聞ってるんー？」

数人の女子に囲まれながら和葉を無言で睨む平次。

そんなちよつとした光景が孝太郎と香織の前に広がっていた。
まだそんな季節ではないのに、この一帯だけ冬が訪れたような錯覚
を覚える。

どうしてこうなったのか。
それは数十分前まで遡る。

「ちよおオレ、トイレ行ってくるわ」

突然そう言い残し、どこかへ走り去る平次。

「ちよつ、平次……っ!？」

和葉の制止は平次の耳には届かず、すぐに視界から消えてしまった。
残された三人は小さく溜息を吐く。
すると孝太郎がそれに気付いた。

「なあ、ここで立って待つとるんもアレやし、あっこの広場で座って待たへん？」

指差した先には大きな広場。
確かにそこならベンチもあり通りもよく見えるので、待つのはピッタリだろう。

「そやね」

「服部と違って小川君は気が利くねえ」

「いや、その……あはは」

香織に褒められ、思わず頬を染める孝太郎。
それを笑って誤魔化しつつ、三人は広場のベンチに座って待つ事にした。

「——あれ？君達……」

しばらく経ち、突然誰かに声を掛けられる三人。
振り返るとそこには……。

「あ、豆井戸さん」

「君達はある探偵君のクラスメイトだよな」

三人に話し掛けてきたのは豆井戸達也という男性。
彼は昨日起きた事件の容疑者の一人だった。

昨日の事件は、家督相続が原因で起きた殺人事件だった。
豆井戸家はこの一帯の名家で、多くの事業を展開している。
また別の話では、伝説の人魚の子孫とも言われているらしい。

殺されたのは達也の伯父で、事件の直前に口論となった達也が真先に疑われたのだが、毎度の如く事件に首を突っ込んだ平次が難なく彼の疑いを解き、事件を解決へと導いたのだ。

「……豆井戸さんはどうしてここに？家とは離れてますよね、ここ」

豆井戸家は三人がいる広場と大分距離が離れている。
不思議に思った香織は、疑問を口にした。

「い、いやーちょっとした散歩さ、ハハ……」

途端に動揺する達也に香織は確信する。

（……和葉に惚れたのか）

先程から和葉をちらちらと見ている達也に、香織はそう結論づけた。

「で、彼はどうしたんだい？」

「あ、平次はさっき『トイレ行ってくる』言つてどっか行っちゃつて……」

「……じゃあ皆はここで待ってるのかい？」

「ハイ、そうなんです」

すると達也の顔がぱあっと明るくなる。

「なら……」

その後達也は和葉と会話をしだした。

孝太郎と香織はすっかり蚊帳の外状態。

「……何か、私達いない事にされてない？」

「せやな……」

遠い目をしながらそんな会話をしている途中、「あれ？」と突然、耳を澄ませる香織。

「どしたん？」

「女子の声……しかも複数」

ある一点を見つめる香織。

孝太郎もそちらへ目を向けると、そこには……。

「服部!？」

こちらへと歩いてくる平次……と、何故か数人の女子。

「何であんな女子がおるん!？」

「……大方『班の子と逸れたのー』とか何とか言っつついてきたんでしょ」

香織の予想は当たっていた。

徐々に近付いてくるにつれてはつきりと聞こえてくる会話（と言っても、女子がほぼ一方的に平次に話し掛けているだけなのだが）がそれを裏付ける。

「……もしかしてやばいんじゃない」

「もう遅いわ……」

「え?……げ、」

孝太郎が再び平次へと視線を向けると、平次の目は和葉を捉えていた。
不機嫌なオーラを撒き散らしながら。

一方の和葉も平次がいると分かっているながら、達也との会話を止めようとしていない。

こうして無言の喧嘩ヤキモチが始まったのだ。

「……もう我慢ならない」

「……………七瀬サン？」

隣から放たれるブラックオーラに、孝太郎は顔が引き攣る。
香織は突然しおりと携帯電話を取り出して、ベンチから立つ。

「ちょっと、電話してくる」

「ど、どこに……」

「あの女子達まこいの保護者」

そう言い残し、声が聞こえるかどうかギリギリの場所で電話を掛け始める香織。

「——あ、優子？あのね……と連絡とれない？あ……も。……うん。
……ってトコにいる……。ありがと、よろしくー」

電話が終了したのか、孝太郎の所へと戻ってくる。

「私は服部を引っ張ってくるから、小川君は和葉をお願い」

「え、」

今度はすたすたと服部達のいる所へと歩いていく香織を見て、慌てて孝太郎も和葉を呼びに行く。

「服部、行くよ」

香織の言葉に周囲の女子は文句を言い出す。

「ちょっと？ウチら服部君に班の〇探してもらおうって頼んどるんやけど」

「そーそー。行くならそっちだけで行つてよ」

女子の身勝手な言い分に、香織は優雅に微笑む。

しかしそれは見る者を凍りつかせるような笑みだった。

「班行動は規則。そして服部は私達の班。貴女達に何か言う権利は無いと思うけど？……そもそも服部は『探す』なんて一言も言っていないじゃない」

「……ッ」

「でもウチら……っ」

「ああ、迷子だっけ？それならお迎えがもつすぐココに来るから。それなら文句ないでしょ」

「……」

「さあ行くよ、服部。小川君達と逸れちゃう」

黙ってしまった女子を置いて、平次に香織はそう告げる。その視線は並んで歩く孝太郎と和葉に向けられている。

平次は無言で二人の元へと歩き出す。

香織はそれを後ろから追いかけた。

ふと香織は和葉の座っていたベンチへと視線を移す。達也が不満げな表情で座っていた。

通りを歩く四人。

しかしその雰囲気は何とも微妙だった。

(気まずい……)

孝太郎は心の中で呟いた。

「……あれ？」

すると隣で歩いていた香織が突然呟く。

「どしたん？」

「……あのお土産屋」

「あれって……さっき二人が見とった？」

「うん。……簪が」

香織が見ていたのは、先程二人が立ち止まっていた土産屋だった。しかし店先には和葉の見ていた簪は無い。

「誰かが買った？」

香織は前方を歩く平次を一瞥する。

「まさか……ね」

お互いを気にしつつも決して目を合わせようとしない平次と和葉に、孝太郎と香織は同時に溜息を吐いた。

気まずい雰囲気（後書き）

香織は優子経由で班の人たちに居場所を知らせたのです。
ここで補足するなよ、自分。

そして今回出てきた豆井戸さん。

……私のギャグセンスなんてこんなもん。

今回和葉を追いかけてきた彼ですが、もうちょっと頑張ってもらったつもりです。

仲直り？（前書き）

「もうヤダ、あの二人」by香織

仲直り？

お風呂あがり、服部と出会った。

「和葉、話がある」

そう言つて服部は和葉の腕を引っ張り、どこかへ連れ去つてしまふ。
私はそれを急いで追いかけた。

「……それでここに？」

「うん」

私と小川君は今、ホテルのロビーにいる。
視線の先には、ソファに座る服部と和葉の後姿。

「……それと」

後ろを振り返る。

「何で貴方がここにいるんです？豆井戸さん」

そこには何故か豆井戸達也の姿。

「一応このホテル、改方の貸切のはずなんですけど」

「ここ豆井戸家が経営してるホテルだからね。小さい頃から従業員とは顔馴染みだし」

何だかんだ言いつつ、結局ちゃっかり一緒に覗いてるし。

周りを見ると、遠巻きから二人を気にする男女も何人かいる。
おそらくは服部か和葉のファンだろう。

しかし当の本人たちは全く気づいてない。
完全に二人の世界だ。

……服部、お前は探偵だろう。

こちらにとっては好都合ではあるが、覗かれてるって気付こうよ。

しばらくすると、服部が動き出した。

無言の空気が辛い。

「……………和葉」

「……」

「和葉！」

「ちよつ！？」

肩を引き寄せ、無理やり顔を合わせる。

「……お願いやから、無視だけはすんなや」

「平次……」

「……これやる」

オレは昼間買ったソレを和葉の手に乗せる。
和葉は驚いた様子で、それを見とった。

「この簪……」

「ソレ、欲しかったんやろ？」

知らんとも思ったか？

探偵の観察眼舐めんなや。

オマエがそれを物欲しそうに見てたんは確認済みや。

「もしかして……」

「トイレのついでや、ついで」

ホンマは簪を買うために抜けたんやけどな。
コイツには絶対に秘密や。
買いに行ったおかげで女子に捕まるし、和葉がオトコと話しとるん
を見る羽目になるし、散々やったけど。

「……おおきに、平次」

……まあ、嬉しそうな和葉が見れたし、結果オーライやな。
和やかになった雰囲気をしばらくの間楽しむ。
無言はもう苦痛にはならなかった。

「……ふあ」

「眠いんか？」

「ん……」

ふと隣の和葉を見ると目がトロンとしとった。
すると肩に和葉の頭が乗っかる。

「……肩じゃ寝にくいやろ」

「うん……？」

寝惚けた様子の和葉を横たえさせる。

太腿にはちょうど和葉の頭。

まあ所謂膝枕ってヤツ？

「少しだけ貸したる」

髪を梳いてやると嬉しそうな表情で笑う。

しばらくそうしてやると、和葉はふにやふに言いながらいつの間にか眠ってしもた。

大切そうに簪を握り締めながら。

「ホンマ寝顔はちっさい頃と変わらんなあ」

思わず笑顔がこぼれた。

「……あの二人はどういう関係なんだい？」

「“幼馴染”です」

「……恋人じゃなく？」

「残念ながら」

啞然とした様子で呟く豆井戸さん。

まあそれもそうだろう。

あの甘い雰囲気を見れば。

「……あんな服部の表情見た事あらへん」

「ちょっと気味悪いよね」

愛しさの溢れた笑みというべきだろうか。

普段の服部からは想像できない（……というかしたくない）表情だ。

周囲のギャラリーも呆然としてる。

「……まあそういう訳で、和葉の事は諦めてください」

傷口が深くなる前に。

幾分か同情を込めて言ってやる。

豆井戸さんは力無く立ち上がり、その場を去っていった。

「大学生って言うってたし、また新しい恋と会おうでしょ」

「哀愁漂ってたな、後姿……」

小川君と一緒に視線で見送る。

彼とはもう、会う事は無いだろう。

「……で、あの二人はいつまでああしてるんだろうか」

「さあな……」

こうして二日目の夜は更けていった。

おまけ

「ハイ、ストロップ」

平次の前に現れた香織。

「何や七瀬」

「これ以上は男子禁制」

香織達がいるのは女子フロアの階段前。
平次は眠る和葉を抱きかかえていた。

「コイツ返しに行くだけやん」

「アンタがフロアにいたらそれだけで大騒ぎになるの」

「せやかてオマエじゃコイツ抱えられんやろ」

「それなら問題なし」

するともう一人、その場に現れる。

「ハア―イ、服部君」

「……三谷」

「そーいう事で和葉は預かるから」

最終的に和葉は優子に抱えられ、部屋まで帰ったとき。

仲直り？（後書き）

結局当て馬にすらならなかった豆井戸達也。

ロビーでいちやつかれたらさぞや迷惑だろうなあ。
しかし平和にそんな自覚は一切無し。

夕日だけが見ていた（前書き）

修学旅行編終了！

夕日だけが見ていた

修学旅行最終日。

一、二日目の反動か、三日目は何事もなくあっという間に終わった。そして帰り道、平次と和葉は並んで歩いていた。

「なあ平次」

「ん？」

「修学旅行、楽しかったね」

「……ま、この後レポート作成とかも残っとるんやけどな」

「う……。思い出させんといてえな」

二人の間に穏やかな時間が流れる。

夕日が辺りを赤く染めていた。

道も、家も、川も、……二人の顔も。

「和葉」

「なあに？」

平次が突然足を止め、和葉もそれに従う。

「平次？」

平次は何故足を止めたのか、自分でも分からなかった。
隣にいる幼馴染の名を呼んだ理由も。

「……別に」

「別に、って何なんよ！ 気になるやん」

困った平次は、少しだけ目を吊り上げる和葉の頭に手を置き、ぽんぽんと軽く叩いた。

すると和葉は顔を真っ赤にして慌てる。

その様子に平次は小さく笑って。

「……簪、大事にせえよ」

普段とは異なる平次の様子に、和葉の心は高鳴るばかり。
それでも平次の言葉に和葉は「……うん！」と確かに頷いた。

夕日だけが見ていた（後書き）

二日目の夜から一気に帰路まで話が飛んだ……。

三日目も色々考えたけど話がまとまらず、結局こんな感じに。

それはそうと平次が偽者すぎる（笑）

きつと夕暮れ時の雰囲気になれたんだと思います。

この後家に帰って「何やつとんねんオレ！」とか思っただろうなあ。

赤い痕（前書き）

それは近い将来の話？

赤い痕

白い項に赤い痕。
私は目を見開いた。

「……和葉」

「ん？」

「ココ、赤いよ」

痕を指差すと、和葉は「ああ」と言っ
て苦笑した。

「昨日な、蚊に刺されてしもたん」

「ホラ、こことかも」と腕を見せられる。
そこにも赤い痕が点々となついていた。

「……まあ、そんな事だろうと思つたけど」

「？」

「あ、こつちの話」

首を傾げる和葉から奴の横顔へと視線を移す。

奴は大きな欠伸をして、いかにも眠そうです、って感じた。

……まだ付き合ってないし、深読みし過ぎたか。

ふと考えてみる。

近い将来、また似たようなやりとりを交わすのだろうか。

その時和葉は、顔を真っ赤にして慌てるのだろうか。

首まで赤く染めながら詰め寄る和葉と、それをニヤニヤしながら、けれども愛しさのこもった瞳で見つめるアイツ。

瞼を閉じれば容易に浮かんだ、そんな光景。

思わず苦笑する。

和葉の気持ちはもう知っている。

だからあとはアイツの心次第^{しかく}。

和葉の将来^{うんめい}を握る服部は、いつの間にか夢の世界へと旅立っていた。

赤い痕（後書き）

「キスマークと虫刺されは本当に間違えるのか」
そんな疑問から生まれたネタ。

ライバルは彼の親友？（前書き）

名前だけ登場の主人公。

ライバルは彼の親友？

「平次のアホッ！」

和葉の声が廊下に響く。

それは教室にいる私にまで届いた。

数秒後、ガラリと開く扉。

そこにいたのは何やらご立腹な様子の和葉だった。

「オハヨ、和葉」

「おはよう香織」

「朝からどうしたの？」

席に着いた和葉に話し掛ける。
すると瞳を吊り上げ……。

「……『工藤が』『工藤の』『工藤に』『工藤と』。……朝から工藤工藤うっさいねんアイツ！！」

「……うわぁ」

「工藤」とはおそらく東の高校生探偵「工藤新一」の事だろう。和葉の反応を見るに、彼の西の高校生探偵が登校中、延々と「工藤」について語り、怒らせたといったところか。いくら服部とその「工藤」が探偵仲間でもちろん同性とはいえ、その相手の事ばかり話されては、服部に想いを寄せる和葉は当然面白くないだろう。

……ま、早い話が「工藤」へのヤキモチってヤツ？

しかもそれがほぼ毎日だというのだから、服部の「工藤」へのご執心ぶりにちよつとばかり怖いものを感じる。

「和葉も、その『工藤』ってヤツも、大変だねえ」

さすがの東の名探偵クンも、まさかここまで懷かれてるとは知らないだろう。

思わず心の中で合掌する。

「和葉ア！」

教室にやってきた噂の服部。

そして二人は再び言い争いを始める。

「……服部の愛情は重いんだろうなあ」

「工藤」への懐きっぷりといい。
和葉への（無自覚の）独占欲といい。

思わず漏れた私の呟きは教室の喧騒でかき消された。

ライバルは彼の親友？（後書き）

朝から「工藤」連呼はきついだろっな、和葉……。

実際はそうじゃないのかもしれませんが、平次は工藤工藤言い過ぎなイメージが頭から離れない。

それは禁句です（前書き）

最近書く服部が、段々情けない奴になっているような……。

それは禁句です

部活帰りにファストフード店へと寄った平次達五人。
翔はハンバーガーを三つ平らげていた。

「よお食べるなー長谷部」

孝太郎の細身の体型とは裏腹な翔の食べっぷりに驚きを隠せない。
すると翔はいつもの笑みを崩さず、女子二人に爆弾を落とした。

「体重が50kgぎっちゃったんで、増やそうと思って」

翔のその発言に、和葉と優子の二人は衝撃で言葉を失くす。
しかしそれに全く気付かない平次。
それが不幸の始まりだった……。

「ひょろいなー、自分」

「ええ。食べても食べても減るんです」

「……ちよっ」

二人を孝太郎は止めようとするも、会話は止まるどころか盛り上が

っていく。

そしてとうとう平次は地雷を踏んでしまった。

「そや、体重といえば和葉。オマエこないだ教室で『太った』言うてへんかったか？」

「服部！」

「先輩！？」

面白がっていた翔も、その言葉には流石に焦りを示す。

孝太郎に至っては頭を抱えて「俺は知らんぞ……」と傍観を決め込んだ。

「……平次」

「な、何や……」

平次もようやく不穏な空気を感じ取ったのか、その顔は引き攣っていた。

和葉は静かに立ち上がり小さく息を吐き出すと、俯いていた顔をキツとあげ……。

「こんの……鈍感無神経男ッ！」

バチンツと乾いた音が響く。

平次の色黒の頬には見事な紅葉ができていた。

それは禁句です（後書き）

これは半分実話です（翔の発言とか）。

ある友人（@男）との会話がキツカケで書きました。

翔はともかく平次は素での発言。

平次は無神経な言葉で和葉を怒らせてそうです。

新一の「ブラジャー（ロス行きの飛行機のやつね）」発言みたいな事はやらかさないでほしいな……。

二人の関係（前書き）

かつこいい平次を目指しました。

二人の関係

「平次なん、推理ドアホのクセにつ！」

「何やと！もっぺん言ってみ和葉！」

「はっ、何度でも言うたるわ。平次の色黒推理オタク！」

「色黒は関係ないやろ！」

まーたやってるよ、あの二人。

本当毎日飽きないんだから……。

そういえばと、ふと頭に浮かんだ過去の一場面。

……あれは確か高校一年の春だったはず。

痴話喧嘩を横目に、私はその日の事を思い出していた……。

高等部へと進学し、外部生も入学して賑やかになった改方学園。

しかしそれはいい事ばかりでもなかった。

中等部からの生徒は、服部と和葉の関係を少なからず知っている。だから表立って二人（特に和葉）にちょっかいをかけてくる輩はあまりいなかった（全くいない……というわけでもないが）。

しかし外部生は二人の微妙な関係など知らないから、何やかんやと突っかかってくるのだ。

その上服部は高校生探偵として活躍し始めて、ファンってヤツも現れてきた。
服部の隣にいる和葉は、やはりファンにとっては面白くないのだろう。

和葉への小さな嫌がらせや呼び出しが時たまあった。

そんなある日の事。

「アンタが遠山和葉？」

和葉と歩いていたら突然話し掛けられる。

声のする方へ顔を向けると、数人の女子が立っていた。

「ちょお、ええ？」

「う、うん……」

「ちょお行ってくるね」と私に残し、女子達とどこかへ行ってしまう。

和葉が心配で、私はそれを尾行した。

万一何かがあった時、和葉を助けるために。

和葉が連れていかれたのは定番の校舎裏。

女子達は立ち止まると、これまたお決まりの台詞を口にする。

「服部君とはどういう関係なん？」

……やっぱりな。

「平次は……幼馴染や」

「じゃあ何で服部君に纏わりつくんよ。恋人やのうて幼馴染なんに、服部君やて迷惑してるやろ」

いやいや、むしろ貴女方が迷惑ですつて。

何でこの手の輩は明確な関係性を求めるんだろうか（まあ、単に難癖つけてるだけなんだけどさ）。

和葉は文句を言う女子達に、凜とした態度で言い返した。

「別に、幼馴染は関係あらへんやろ。平次は迷惑な時ははつきり『迷惑や』言っし。……大体、一緒におる事に理由なんかいるん？」

「！……このっ……」

リーダー格らしき女子の目が鋭くなる。

一触即発の雰囲気。

しかし、それは意外な人物によって破られた。

「何やっとするん？」

「和葉！」

「平次！？」

突如現れた服部と優子の二人。

優子は和葉の手をとり、その場から離れるよう促す。

「行こつ、和葉」

「ゆ、優子っ」

「まだ話は終わってへんで！」

「……こつからはオレが話聞いたるで」

和葉を背に隠すような形で対峙する服部。

二人が離れた事を確認すると、女子達へと鋭い視線を向ける。

するとリーダー格の女子が、場の空気に耐え切れなくなったのか口を開いた。

「……何で！二人は一緒に居るんです？恋人やないんでしょ！？」

「……オレな、その恋人やからとか何やからとかがよお分からのや」

「え？」

「一緒に居るんに何やそーいうんがいるんか？別にいらんやろ？……それにな、少なくともオマエらにオレの交友関係へ口出しされる筋合いなんあらへん。迷惑なだけや」

その声色に僅かながらの怒気を感じ、押し黙る女子達。
そして服部はとどめを刺した。

「今度和葉に変なイチャモンつけて手エ出してみ？オンナやからって容赦せーへんぞ」

そう言つて服部はその場を去った。

「何やの、まったく！」

文句を言いながら席へと座る和葉。
そんな和葉の様子に苦笑する。

……和葉知ってる？アンタはいつだって、服部に守られているんだ

よ。

数え切れないほどに喧嘩しても、心の奥では深く強く、繋がっている二人。

服部の、和葉へ向かう多くの思いの中に、和葉の望むような恋心があるかはまだ分からないけど。

それでも、和葉を大切に思っているのは確かだから。

「大丈夫だよ、和葉」

「?う、うん……?」

私の言葉に、和葉は首を傾げた。

二人の関係（後書き）

幼馴染だったり友人だったり姉弟だったり兄妹だったり保護者的存在だったり……。

平和の関係って新蘭以上に色々内包していて、一言じゃ言い表せないイメージ。

話の展開が少女漫画チックかな？

前二作の服部があまりにアレだったので、名誉挽回に。

恋愛感情の有無は置いて、平次は和葉を一番大事に思ってるんじゃないかと（その割に扱いは……って感じですけど）。

それが平次のあの発言に繋がってます。

三大欲求（前書き）

平次も一応健全な男子高校生です。

三大欲求

「アタシ、平次の三大欲求は“食欲・睡眠欲・推理欲”やと思うんだよ」

「……うーん」

和葉の突然の言葉に思わず私は頷きそうになるが、何よりもまずは疑問を口にする。

「どうしたの突然」

「あんな、昨日ふと思で、平次に言ってみたんよ」

「ほ、本人に……」

「うん。そしたら溜息吐かれて。何でやろ」

「それは……まあ」

幼馴染で近すぎる関係故なのか、性差故なのか、はたまたその性格故なのか、（いくら推理オタクとはいえ）健全な男子高校生の性欲を否定されるとは。

私も女である以上想像の範囲を抜け出せないが、服部平次、なかなか複雑な心境だっただろう。

「……和葉」

「ん？」

「オトコノコ異性をあまり信用するもんじゃないよ」

「??？」

男子高校生を理解しきれない和葉の無防備さに少しばかり危うさを感じて、一応の忠告をするも、あまり伝わらなかったようだ。

「……ま、それでも特に心配は要らないだろう。
和葉にはとつても怖い番犬が付いているし。」

探偵なんぞをやっているドーベルマンが……ね？

三大欲求（後書き）

和葉のその手の疎さは私の友人を少し参考にしています。

実際のところ、男子高校生の脳内はどうなってるんでしょうか？
女の私には永遠の謎ですな。

嵐の転校生（前書き）

転校生に嵐の予感。

嵐の転校生

「皆つ、今日転校生が来るんやて！」

生徒の一人が興奮気味に教室へ駆け込んでそう叫ぶと、クラスメイト達はわっと盛り上がった。それは和葉も例外ではない。

「どんな子おやろね？」

「さあね……」

和葉は目を輝かせながら香織に話し掛けるも、香織の反応はあまりに素っ気無いものだった。

どうやら転校生への興味は一切無いらしい。

それどころか、何故か苦虫を噛み潰したような表情になっている。

「香織？」

「HR始めるから早座れー」

和葉の声は担任の着席を促す言葉でかき消された。

「西園寺真莉亜です」

担任に促され入ってきた転校生の少女に、生徒達（特に男子）から歓声があがる。

それもそのはず。

整った容貌と色素の薄いウェーブがかった髪の実莉亜は、まるで西洋人形のような愛らしさだったからだ。

「へえー、結構可愛えやん。なあ、服部」

「ほーか？」

「反応うつすいなー。……ま、普段あんだだけ美人を見とればな」

「和葉は美人ちゃうぞ？」

「……俺、“遠山”なんて一言も言つてへんけどな」

孝太郎は言葉とは裏腹に、さほど転校生に興味は無いようだ。平次に至っては一瞥したのみ。

どうやら二人にとって、真莉亜は心奪われる存在では無いらしい。

「でも……」

「ん？」

「どっかで見た事ある氣イが……」

「うーん……“西園寺”家やし、事件の依頼なんかで会ったんとかやう？」

西園寺家は鈴木家に次ぐ財閥だ。

特に西日本中心にその名は知れ渡っていて、平次も何度か依頼を受けた事がある。

「かもな……」

孝太郎の言葉に納得したのか、平次はそれ以上追求はしなかった。

HR終了後、一部の人達を除き、真莉亜の席の周りに生徒達が集まる。

クラスメイトの質問に真莉亜はにこやかに答えていく。
するとある一人がこんな質問を投げかけた。

「真莉亜ちゃんは何で改方に来たん？」

それがある意味嵐の始まりだったのかもしれない。

「実は……服部平次様に逢う為なんです！」

「!？」

「……ん？」

真莉亜の言葉にクラスは騒然。

一方の名前を呼ばれた少数派の人間の平次は、呑気に真莉亜の方を向く。

真莉亜はおもむろに立ち上がると平次の席へと歩き、そして満面の笑みで……抱きついた。

「なっ!？」

「あの日からずっとお逢いしたかったです、平次様っ！」

「ちよっ、離せえ！」

真莉亜の突然の行動に、クラスメイトは一斉に和葉へと視線を移す。和葉は香織に目隠しをされ、どうやら抱きつく瞬間は見ていなかったようだ。

和葉の気持ちを知るクラスメイトは修羅場を想像していたのだが、香織の咄嗟の機転で最悪の事態が回避された事に安堵する。いきなり視界を隠された和葉は、香織の手を退けようとする。

「香織ー見えへんよお？」

「……香織？」

和葉の言葉に真莉亜の動きが止まる。

真莉亜は平次から離れ、ゆっくりと和葉と香織のいる方向へと目を向けた。

「！貴女、まさか……っ」

「……ちっ」

香織を視界にいれた瞬間、真莉亜の目が見開く。

一方の香織は舌打ちをし、普段からは想像もできないような黒いオリウを放っていた。

回避できたかと思われた修羅場が別の形で実現しかけている事に、クラスメイトは戦々恐々としながら、しかし興味深そうに見守っている。

「へ？へ？？」

二人の最も近くにいながら最も状況を把握しきれない和葉は、ただただ頭上に疑問符を浮かべていた。

嵐の転校生（後書き）

名前はあっても全然出てこなかった真莉亜さん、ようやく登場です。
香織と真莉亜の因縁？は次回にて。

……展開が少し早すぎたでしょうか？

因縁の二人（前書き）

香織と真莉亜、その因縁とは……？

因縁の二人

和葉が疑問符を浮かべている間も、香織と真莉亜は無言で対峙している。

先に無言を破ったのは真莉亜だった。

「ふふふふ……。『ここで会ったが百年目』ですわ、香織……っ！」

「人違いじゃないでしょうか。私は貴女を全く知りませんし？」

「くっ、その反応……。っ。変わってませんわね！」

「人の話聞いてます？知らないって言っているのに。ホント学習能力の無い人って嫌」

「な……。っ!!」

香織のいつそ穏やかともいえる表情とは裏腹な言葉と背後の黒いオリラのギャップに、クラスメイト達はこのツツコミ所満載な光景を見ているにもかかわらず、何も言えない。
この変な緊張感の漂う場を崩したのは……。

「香織、真莉亜ちゃんと知り合いなん？」

ようやく状況を（かなりずれた形で）理解した和葉。

どうやら和葉に香織のオーラは全く効果がないようで、純粹に疑問のこもった大きな瞳で香織を見つめている。
その瞳に毒気を抜かれたのか、香織から放たれていた黒いオーラが霧散していった。

（遠山（和葉）ナイス……！）

クラスメイト達に内心「勇者や！」と和葉は称えられていたのだが、それを当の本人が知る事は一生無いだろう……。
ともかく教室に訪れた（一応の）平穩に、安堵の空気が広がった。

「……和葉、あれの事は気にしないでいいから」

「あれって何よっ！……ってか、ちょっとは気にしなさい！！」

未だに噛み付いてくる真莉亜を、香織は冷たい目で見る。

「忘れもしませんわあの日々を……っ！何においても私よりも上で！その拳句に勝ち逃げなんて！！」

……真莉亜の言葉から推測するに。

どうやら香織は真莉亜のかつてのクラスメイトらしい。

そして勉強でもその他の事でも、常に香織が真莉亜に勝ち（……まあ、真莉亜が一方的に挑んでいたのだろっが）。

その拳句、香織は転校したので真莉亜の目には「香織が勝ち逃げした」ように見えたのだろう。

クラスメイト達はようやく背景を理解し、二人の温度差のある争いを生暖かく見守るだけの余裕が出来た。

因縁の二人（後書き）

ここまで和葉ちゃんは天然じゃないだろうと自分でツッコミ（オイオイ……）。

多分次でこの編は終わりになります。

宣戦布告（前書き）

真莉亜の次なる標的は……。
ライバル

宣戦布告

朝の一件が落ち着いた頃、和葉は背後にコチヲを探るような、謎の視線を感じていた。

（な、何やる……）

恐怖は全く感じない。

ただ酷く落ち着かないのだ。

「うーん」と和葉が唸っていると、香織が心配そうに話し掛けてきた。

「どうしたの、和葉」

「んー、ちょっとね……」

「何かあったんか和葉」

「平次」

香織と話していると、平次もその中に参加して来た。
和葉は戸惑う。

何故か二人がやって来た途端、視線が鋭くなったのだ。

（ホンマ、何なん……！？）

「和葉？」

「ホ、ホンマ何でもないんよっ……アハハ」

視線の主は分からないまま、放課後になった。

「……遠山和葉サン？」

「ん？どないしたん、真莉亜ちゃん」

突然和葉は真莉亜に呼ばれた。

クラスメイト達は（修羅場来たか！？）と不安交じりの期待を寄せる。

香織は和葉を庇うように、二人の前へと出た。

「和葉に何か用？」

「……」

香織が現れると真莉亜は俯き、何事かぶつぶつと呟く。
そして……。

「……遠山和葉！」

「は、ハイ！」

真莉亜は顔をあげたかと思うと和葉をキッと睨み、

「貴女には……貴女にだけは！香織と平次様は渡しませんわ！！」

「……へ？」

「は？」

そう宣言すると、「覚えてらっしゃい」と悪党が言いがちな台詞を残して帰ってしまった。
残された一同はぼかんとする。

（服部は分かるけど……何で七瀬！？）

内心で全員、そうツッコむ。
そして当人達は……。

「ど、どういっ……?」

「和葉、今の事は全部忘れよう。ね?」

「え、え?」

状況を理解しきれていない和葉に、香織は必死にそう言い聞かせる。
それはもう必死に。

「……西園寺は七瀬を気に入ってた、っちゅー事か?」

ぼそりと孝太郎が呟く。

「そんでもってその七瀬が気に入ってるんが遠山で、ついでに言えば服部も遠山を気に掛けとって……」

「要は、遠山への嫉妬?」

「香織と服部君が和葉に構ってるから……」

ぼそそとクラスメイト達の間で意見がまとまっていく。
そして一同の出した結論は……。

「西園寺真莉亜と遠山和葉は（一方的な？）恋と友情のライバル」

今後の展開にクラスメイト達は期待が膨らみ、香織は頭を抱えた。
キーパーソンの平次と和葉は何も知らないまま……。

宣戦布告（後書き）

嵐というほどのものではなかったかな。

ただ真莉亜が和葉をライバル視する理由が書きたかっただけです。

平和の長い一日（前書き）

長い一日の始まり。

平和の長い一日

ある日の日曜日。

公園の時計を眺めながら、和葉は人を待っていた。

頬を赤らめながら時々周りを見渡す様子に、周囲の人々は「ああ、デートか何かの待ち合わせか」と思うであろう。

まあ、実際は幼馴染である平次と映画を見に行くだけなのだが。

「遅いなあ、平次……」

彼の幼馴染は事件を理由にドタキャンをする事が多々あり、今回もそうなるのではと、和葉の心に不安が広がる。
そんな時、和葉を呼ぶ声が耳に届いた。

「和葉ア！」

「平次っ」

息を切らせ駆けて来る平次に、和葉はこっそりと安堵する。
平次は眉尻を下げ、遅れた事を詫びた。

「スマン、寝坊した……」

「ええよ。まだ映画まで大分時間あるし」

「そか。……ほな、行くか」

「うん」

そんな会話を交わしながら、二人は歩き出した。
それを影から見ている人達がいるとも知らずに……。

「ふふふ……。一時はどうなるかと思ったけど、やっと二人が動いたわ」

「三谷……」

「三谷先輩……」

草陰で怪しげに笑う優子と、それを呆れた様子で見る孝太郎と翔。
傍から見ればただの不審者だ。

やる気満々な優子とは対照的に孝太郎と翔はかなり渋々といった様子。
子。

どうやら男二人は無理やり連れてこられたようだ。

「……大体、どうして七瀬先輩が居らんです?」

優子の暴走を止める事ができてなおかつ師として仰ぐ香織の不在に、かなり不満げな様子の翔。

孝太郎も「そうだ」と言わんばかりに頷いている。

「最初は香織も誘おうとは思ってたんやけどね、どうせ『止めときなさい』って言われるだけやし……」

その光景が容易に浮かび、思わず苦笑する二人。

「せやから暇そおなあんたらをね……」

「こちらの都合はお構いなしですか」

「ん？どおせ予定なん、ないやろ？」

「……」

図星だったのか翔は目を逸らし、一方の優子は小生意気な後輩を言いくるめられた事に上機嫌だ。

そんな二人を尻目に、孝太郎は小さくなっていく平次と和葉の後姿を見ながら「なあ」と話し掛けた。

「アイツら追いかけてええんか？」

「！いい、急いで追いかけんとっ」

二人は目を凝らさなければ見えないほど先を歩いている。
優子達は急いで、しかし見つからぬよう慎重に尾行を始めた。

平和の長い一日（後書き）

前回はあまりに平和要素皆無だったので……。
今回はドタバタコメディかな（ラブは？）

デート？中の男女を尾行する三人組、傍から見れば完全に不審者です。

桃色電車（前書き）

電車内にて。

桃色電車

歩きの二人は現在電車に乗っているのだが、二人のいる車両は休日のためか空いていた。

「やっぱ映画は昼飯の後か？」

「せやねー……」

その気質ゆえか、平次は手すりに掴まり、端の席に座る和葉の正面に立っていた。
時折軽いじゃれ合いをしながら会話を交わしている。

そんな二人の周りだけ、どことなく甘い空気で、侵しがたい雰囲気
に包まれていた。

「……あれで“幼馴染”つちゅーんが信じられんよなあ」

「あの空気は恋人ですよね……」

隣の車両から平次と和葉を観察していた孝太郎と翔は、目の前の光景に呆れ交じりの眩きをもらった。
しばしと座席を叩き一人身悶えている不審者^{ゆづり}を意識から外しながら。

「何で俺、ここでこんなんしてるんでしょつか……」

「俺も知りたいわ」

二人は出来るだけ優子と距離をとりつつ、観察を続けた。

「平次？」

「ん？」

「どないしたん？さっきからボーっとして」

少しだけ心配そうに平次を見る和葉。

平次は苦笑し、和葉の頭を軽く2、3回叩いた。

「心配すんなや。別に何でもないで」

「そう？」

「せやせや。それより昼何食つか考えとけ」

「うん」

楽しそうに笑う和葉に、平次は小さく安堵の溜息を吐く。
そして「平次は何食べたい？」という和葉の問い掛けに「せやなー
……」と返しながら、別の事に頭を働かせていた。

やがて電車は目的の駅へと到着し、平次と和葉は電車から降りる。

「へえ……初めて来たけど綺麗やねえ」

和葉は改札を出た後、周りを見渡しながら小さく感想をもらした。
平次と和葉は昼食をとるべく街中を散策していると……。

「……あれ？」

「どないしたん？」

和葉の目が見覚えのある後姿を捉えた。

「あれって……」

桃色電車（後書き）

いちゃいちゃ……してませんよね、やっぱり。
そろそろ尾行組の一人が危ない人になっています。

予定外の接触（前書き）

平次はやっぱり気付いてました（笑）

予定外の接触

「香織っ」

「ん？……って、和葉！？」

和葉達の前を歩いていたのは何と香織だった。

声を掛けられた香織は、少しだけ戸惑いつつ二人の元へと駆け寄る。

「やあ、お二人さん。これから映画？」

「うん。今どこで食べようか悩んでるんよ」

「ふーん。……だったらこの道の角にあるパスタ屋さんが安くて美味しいよ」

「そうなん？ならそこで食べよっか」

「せやな」

その後二言三言言葉を交わし、香織は「じゃあまた」と踵を返そうとする。

それを平次は呼び止めた。

「……何、服部」

「ちょお頼みたい事があんねん」

そう言うと平次は香織に何かを耳打ちする。

香織は呆れた顔をしながら「……分かった」と返して、今度こそ二人から離れた。

「何頼んだの？平次」

「ん？ちょお退治をな」

「退治イ？」

「まあエエやん。ホレ、さっさと行くで」

「あつ、ちょお待ってよ！」

スタスタと歩いていってしまう平次を和葉は駆け足で追いかける。そして二人がパスタ屋に着く頃には、和葉の脳内から平次の言葉への疑問はすっかり消えていた。

香織の登場に驚いたのは平次達だけではない。

「な、何で香織が居んねんっ」

「知らん！」

影から二人を見守って（？）いた優子・孝太郎・翔も例外ではなかった。

「何話してたんですかね」

「さあ……。それよりもとにかく二人を追わないと」

「……ちよつと」

「!？」

三人の背後から突然誰かが話し掛ける。

三人同時に振り向くと、そこには紙袋を抱えながら呆れ顔で三人を見る香織が仁王立ちしていた。

「全く、覗き見とは趣味いいわね優子……」

「うつ……」

「それに二人も。わざわざ優子に付き合わなくてもいいでしょうに。……ま、何があつたかは大体予想がつくけど」

明らかな香織の皮肉に、優子はバツの悪そうな顔を浮かべる。
孝太郎と翔も若干気まずそうに顔を逸らした。

「……七瀬先輩はどうして俺らの事気いついたんです？」

「ああ。服部にアンタらを片しといてって言われたから」

「服部君気いついとったん！？」

「……あのさ、彼一応探偵だからね」

「そうだった」とポンと手を叩く優子をジト目で見ると、香織は一度小さく咳払いをし三人を一瞥する。

「……とにかく、これでストーカーは止める事」

「えー」

不服そうな優子を香織は軽く睨む。

こうして三人の尾行劇はあっさりと終わった。

（七瀬が上手くやってくれたみたいやな……）

ランチを終えて映画館へ向かう途中、背後の気配が消えた事に平次

は小さく安堵する。

待ち合わせの場所に着いた時点で、平次はとくに三人に気付いていた。

それでも昼食の時までは我慢していたのだが、結局は香織を使って何とか追い払う事に成功し、笑みを浮かべる。

「平次？」

「何や」

「ニヤニヤして気持ち悪いで？」

「気持ち悪いって何やねん。男前やろ」

「全国の男前に謝り？」

「何でやねん！オマエかてじゃじゃ馬やんけ」

「アタシ関係ないやん！大体じゃじゃ馬ちゃうもんっ」

「ならお子ちゃまか？」

「何でそうなんねんっ！」

歩きながら言い争いをする美男美女の若いカップル。

女は頬を膨らませながら絡ませた腕を解こうとはしないし、男も口ではからかっても女を見る目はどこか甘く、優しい。

この二人がただの幼馴染であると誰が信じるであろうか。

そんな何とも不思議な幼馴染は、仲良く映画館へと入っていった。

予定外の接触（後書き）

ストーカー・sがいなくなったためか、二人が一気にいちゃいちゃし始めました（笑）

何かこの二人、平気で腕組んだりするイメージがあるんですね……。

あと間接チューとかも。

後で和葉は気付いて顔を真っ赤にしたり、とか……。

お願いだからもうちょっと平次を何とかしてください青山先生……
for z

告白とかじゃなくても、せめて平次にその辺の自覚をさ。

和葉ちゃんがあまりにも（蘭とは違う意味で）報われなさ過ぎて辛すぎるんだ……（すいません何か変なスイッチ入ってしまいました；
）

お約束？（前書き）

そのまま何事もなく……いかなのが探偵＆幼馴染カップル（？）
クオリティ。

お約束？

「はー面白かったなあ、平次」

「せやな」

映画館から出た平次と和葉。

二人の様子から見るに、どうやら映画はお気に召したようだ。

「……で、平次は先に謎解けてたん？」

「つたり前やろ。……まあ最後のあのどんでん返しは予想外やったけど」

「ふーん。まだまだやねえ、西の高校生探偵サン？」

くすくす笑う和葉の隣で若干拗ねた様子の平次。

その子供みtainな様子にまったくすりと笑うと、和葉は平次の腕を引っ張る。

「平次っ、あそこで休も？」

和葉が指差したのは小さな喫茶店。

特に異議の無い平次は「ええで」と言いかけて突然固まる。

その目は一点を見つめていた。

「どないしたん？」

「アレ……」

平次の視線の先へ和葉も目を向ける。
大きな瞳が僅かに見開いた。

「！……行ってみる？」

「ああ」

「……映画のペアチケットを和葉にあげたのは私」

小さな喫茶店で注文したコーヒーを口に運びながら、香織は話し始める。

香織の隣には孝太郎、そして向かいには優子と翔が座っていた。

「何でなん？」

そう聞くのは優子。

その手は未だに砂糖をコーヒーに入れている。

「あの映画、初日に遊びに来てたイトコと見に行ったからね。推理物を二度見る気はないし」

「イトコって……？」

「私より一つ下の女の子。あの子も推理物好きだから」

「……さやか」

孝太郎は密かに安堵する。

そんな彼の様子に疑問を持ちつつも、香織は優子に質問をぶつけた。

「それより優子……何で和葉達が映画に行くの知ってたの？」

「そ、それは」

無理やり連れてこられた孝太郎と翔も頷いている。

「部活の時和葉が『映画楽しみやなあ』て小さく呟いとったから……」

「……だからってストーカーはやっちゃ駄目でしょ」

「うう……」

「全く……」と香織は窓の外へ視線を移し、突然コーヒを飲む手が止まった。

普段の彼女には珍しく、酷く驚いている。

「七瀬？」

孝太郎達は香織に倣い、同じように窓の外を見る。

「!？」

外では驚きの光景が繰り広げられていた。

円を描くようにして集まっている野次馬。

その中心には平次と、ナイフを手に和菓子を人質にしている男が対峙していた。

時折男は声を張り上げナイフを振り回している。

四人は会話中気付いていなかったのだが、よく見れば店内の人達も外の光景に目が釘付けで。

「え、……ええ——っ!？」

思わず香織を除く三人は叫んでいた。

お約束？（後書き）

ストーキングは止めたものの、近くの喫茶店で談笑していた四人。そして事件に巻き込まれる平和。

和葉が人質に取られています。その辺の経緯は次回の投稿で。

甘いデートはまだ遠い（前書き）

教訓：人質選びは慎重に行いましょう。

甘いデートはまだ遠い

(……どないしょ)

人質となつてしまった和葉は考えていた。

今彼女の中にあるのは恐怖ではなく、毎度の如く事件に巻き込まれる事への呆れと、如何にしてこの場を打破するかという思いのみ。

(一応ナイフやし、怪我するんは嫌やけどこのままもなあ。……いっそ怪我覚悟でやつたるかな……)

一方和葉をよく知る平次も内心かなり焦っていた。

心配していると言ってもいい。

ただしその矛先は微妙にずれていた。

(アイツが切れる前に何とかせんと……でも、どうやって)

元来和葉は平次と同じく気の長い方ではない上、やろうと思えば男一人投げ飛ばすのは容易だ。

いつ我慢の限界が訪れても可笑しくない。

和葉が男に負けるとは露ほども思っていないが、相手はナイフを持っている以上、怪我をしない保障はどこにもない。

平次にとって和葉が怪我するという状況は何としても避けたい。

どうするべきか周りの野次馬を見渡しながら思案していると、ある数人の男女が目に入った。

「！」

（何でアイツらが居んねん！）

そこにいたのは自分が追い払ったはずの香織達。平次の視線に気付いたのか、香織は手を大きく振っている。その手には紐のついたキーホルダーのようなものが握られたいた。孝太郎達もそれぞれが手に何かを持っている。それだけで彼らの思惑は平次に伝わった。

（……ったく、しゃーないか）

和葉に視線を移し、アイコンタクトで伝える。

（ソイツの気を逸らせるさかい、その隙に逃げろ）

（了解）

男に気付かれぬよう小さく頷いたのを確認して、再び香織達へと視線を送る。

香織はその視線を合図に孝太郎達へと指示を出した。

その瞬間その場に流れた大音量の電子音。

野次馬達が音のする方へ一斉に振り返る。

そして和葉を人質にしている男もまた……。

「っ！」

男の力が緩んだ瞬間、腕を振り払い何とか拘束から逃れる和葉。逆上した男はナイフを振り上げ襲いかかってきた。しかし……。

「たあっ！」

「なっ！？」

ナイフを避けつつその腕を掴むと、相手の力を利用し投げ飛ばす。空中を舞った男はそのまま地面に叩きつけられ、すぐに平次によって取り押さえられた。その一連の流れがあまりに自然で、周りの野次馬達から拍手がもれる。

その後男はパトカーに連行されていった……。

『…………で?』

電話越しでも分かる平次の鋭い声。

香織は気にする事なく淡々と事実を述べる。

「私達は偶々近くの喫茶店でお茶してただけ。心配しなくとも尾行
なんてしてないって」
ストーカー

『ホンマか?』

「ホントよ」

『ならエエけど…………』

「用件はそれだけ? だったら切るよ」

『あ、ちょ…………っ』

ピ、と小さく電子音が鳴り、通話が切れた事を知らせる。

香織は携帯をベッドに放り投げると、椅子に深く項垂れた。

「無銭飲食ならまだ罪も軽かろうに…………、まあ自業自得か」

ネットのニュース曰く、男は無銭飲食で逃げていたところ前方を歩

く和葉に目を付け、そのまま人質にして逃走しようとしたらしい。

「……しかし流石だね、あの二人。こうも事件に遭遇するとは……」

男が捕まった後香織達はすぐに逃げたので、その後の二人は知らない。

しかし先程の平次との会話から察するに、二人は警察で軽く聴取を受けそのまま帰宅したらしい。

デート（本人達は否定するだろうが）にしてはあまりにお粗末な終わり方だ。

親戚から届いた白い封筒を開けながら、香織は小さく苦笑した。

甘いデートはまだ遠い（後書き）

お粗末なのはこの話の終わり方だ、と思いながら書いたデート編。
無計画は不味いですね、やっぱり。

短い話の方が性に合っていると気付いた冬の昼下がり。

月夜の下で「こんばんは」(前書き)

気障KIDな魔法使いと小さな魔女香織が会おう夜。
平和要素は皆無。

月夜の下で「くんばんは」

「これも違う……か」

ビッグジュエルを月に翳^{かざ}して落胆の声で呟くのは白い翼の大怪盗――
――KIDである。

彼がいるのは人気のない公園の広場。

どうやら宝石を盗み出し、警官や探偵達から逃げ延びた後のようだ。

「……つたく、折角大阪まで来たつてのに」

「わぁーお」

「っ！？」

背後から聞こえる足音と少女らしき声。

外しかけたKIDの仮面を慌ててつけ、注意深く振り向く。

そこにいたのは一人の少女だった。

セミロングの黒髪に黒いタートルネックのセーターと、闇から現れた魔女なのかと一瞬錯覚しそうになる。

漆黒の中、唯一赤いチェックのスカートが少女に明確な色彩を与えてた。

「まさか怪盗KIDに出逢えるとは」

手を後ろにまわしたまま少女が近付いてくる。

言葉とは裏腹に、表情から驚きの様子は感じられない。

その反応といい理知的な光を宿す瞳といい、幼さの残る外見とは何ともアンバランスだ。

「今晚は、お嬢さん。こんな時間に出歩くのは感心しませんね」

「あら、高校生はまだ外出してもいい時間だった筈だけど」

KIDは幼い外見から中学生、もしくは小学生かと思っていたが、実際は彼と同じ高校生らしい。

しかしそれを差し引いてもあまりにも彼女の落ち着いた態度には違和感が残る。

普通ならもつと騒がれても可笑しくないはずなのに……と。

「何でそんなに冷静なのかとも言いたげね」

「！」

少女の的確な指摘にKIDは目を見開く。

そんな彼を面白そうに見ると、少女は僅かに口角をあげた。

「生憎と、私はこの手の事には慣れてるからね。まあ貴方を追いか

けている探偵達ほどじゃないけど」

（……探偵といい、この子といい、クラスメイトといい、何でも俺の周りには妙な奴ばっか集まるんだ？）

自分も間違いなく“妙な奴”にはいるだろう事は棚にあげてしみじみと考える。

「それより貴方、早く逃げたほうがいいんじゃない？」

「え？」と少女の言葉に首を傾げ、すぐに理解する。

遠くから聞こえるパトカーのサイレン。

少女がおもむろに出て見せた通話中の携帯電話。
その通話の相手は……。

「服部平次」……」

「そ。一応私、彼のクラスメイトなの。さっきまでの貴方との会話は筒抜けよ」

「手をずっと後ろにまわしていたのはこういう事ですか」

「Yes」と無邪気な笑みで返す少女。

しかしK I Dには悪魔の笑みにしか見えなかった。

慌てて逃げる準備をするK I Dを、少女はただ見つめている。
まるで捕まえる意志はないとでも言いたげに。

K I Dは逃げ出す直前、少女へと向き直る。

「……小さな黒魔女さん。貴女の名前を伺ってもよろしいですか？」

それはK I Dなりの、彼を追いつめた少女への敬意。
少女は小さく微笑む。

「貴方と私は再び見える^{まみ}。私の名はその時に」

言っていて恥ずかしくなったのか、少女は目を逸らし口を押さえている。

よく見ると頬も僅かに赤い。

「……恥ずかしいのなら言わなくてもいいものを」

「気障な魔法使いさんに合わせてみたけど……慣れない事はするものじゃないわね」

ドタドタと複数の足音が近付いてくる。

中森警部や西の高校生探偵のK I Dを呼ぶ声も。

「……お別れの時間が来たようですね」

「あらホント」

「では小さな黒魔女さん。また次の機会に」

「ええ、また。……貴方が捕まらなければの話だけど」

音もなく消え去る純白の怪盗。

彼の代わりとでも言いたげに、光をうけて輝く宝石が残された。

月夜の下で「じんばんは」(後書き)

ふと思いついた話。

絆（前書き）

拳銃に撃たれたり、海に落ちたり、乱闘したり…… e t c
生傷の絶えなさそうな探偵に、見守る方はいつもハラハラ。

絆

「平次！御守り持った？」

「おう！」

「氣イつけてな！」

「任せとき！」

それは服部が事件へ向かう前の、お決まりの光景。

「御守りね……」

高校生でお揃いの御守りを持つなんて話は殆ど聞いた事がない。しかも世界に二つだけの特別製。

これでただの“幼馴染”と主張するのだから何とも変わって思う。

それでも「まああの二人だし」と納得してしまう自分は、あの二人に慣れすぎて（毒されて？）きつと感覚が麻痺してる。

二人を知る人なら皆分かってくれるだろう。

この辺の、微妙な感覚は。

「はぁ……」

窓の外を見ながら溜息を吐く和葉。

きつと頭の中は服部の事で一杯なのだろう。

……そんな事を考えてたら。

「……よしっ！」

「？」

「香織！」

「な、何」

「放課後、あの新しく出来たカフェに行こっ！」

「……は！？」

満面の笑みで、和葉から放課後のお誘い。

あの寂しげな和葉の姿は一体どこへ？

「え、えーと……」

戸惑い気味な私へ、和葉はさらに言葉を重ねる。

「優子も誘ってさ。……ね？」

「……う、うん」

その気迫に思わず頷くと、少しだけ安堵の表情を浮かべる和葉。
ああそうか、と唐突に理解する。

服部が事件へ赴くたびに無茶をするのは知っているから、心配自体をやめる事はできない。

けれど心配してばかりではいられないと、和葉自身も分かっている。
だからこそ今回のお誘いなのだろう。

少しの間だけでも服部の事を忘れられるように。
帰ってきた彼を笑顔で出迎えるために。

「……たく、さっさと解決しなさいよ」

思わずここに今いない服部へ、そう毒づいた。

そして後日。

やっと事件を終わらせたかと思えば、今度はまた別の事件らしい。

「平次！御守り持った？」

「おう！」

「氣イつけてな！」

「任せとき！」

やっぱり普段と変わらないその光景。

和葉はほんの少しの寂しさを隠して服部を見送る。
服部は知っているのだろうか。

……いや、絶対に氣付いてないな。
鈍感だし。

「和葉も大変だねえ」

それでも二人は信じ合っているのだろう。
必ず事件を解決して、帰ってくる事を。
自分を見送って、待っていてくれる事を。
深く、深く。

御守りは、そんな二人の絆の象徴だと私は思う。
“幼馴染”や“姉弟”や“恋人”（……はまだか）といった、一言
では表せない二人の複雑な関係を物語っているのだとも。

和葉に目を向けると、服部の去っていた方向を祈っていた。

その手に御守りを握って。

絆（後書き）

テーマは「御守り」と「見守ってくれる人がいるから探偵は事件へと向かう事（もしくは無茶）」が出来るんだ」の二つ。

まあぶっちゃけ、テーマの内容はあつてないようなもんですが（特に後者）

珍しく微シリアス？

……というよりはドタバタコメディ（？）が無い。

告白劇（前書き）

男の告白とそれを聞く女。

告白劇

「——それでもオレは好きなんや」

「……はあ」

夕日に照らされた放課後の教室。

香織は日誌を書いていた手を止め、文字の羅列から平次へと視線を移す。

平次は窓に腰掛けてぼんやりと外を眺めていた。

「そんなの、今更だとは思っけど」

「悪いとは思っ取る。でも、」

「……ホント服部は勝手だね。待ってる方の身にもなって」

「せやな。……甘えてるんやろなア、オレ」

校庭を見つめながらそう呟く平次を、香織は呆れた様子で見る。

「——……やっぱり、そーいうのは本人に直接言つべきだと思っただけだ」

「そう思わない？小川君」と教室の扉に向かって香織がいきなり話し掛け始める。

平次は慌てて立ち上がり、扉の向こうではガタリと物音。

平次の「……オイ」というドスの効いた声に促され、孝太郎が教室へと入ってきた。

「盗み聞きとはいい趣味してるね」

くすりと笑う香織。

どうやら彼女は全て分かっているようだ。

一方何故孝太郎が盗み聞きする事になったのか分かっていない平次は、頬を僅かに染めて孝太郎を睨んでいる。

「七瀬、わざとやる」

「そんな顔しないで小川君。偶然だよーぜん。私はなーんもしてないよ？服部が勝手に喋って、小川君が勝手に勘違いしただけ」

「……で、孝太郎はどっから聞いとったんや」

「え……『それでもオレは——』てトコから」

孝太郎の言葉に平次は暫く考え込むと……。

「誰が七瀬^{コイッ}に告白なんするかっ!？」

突然机を強く叩き平次が叫んだ。

その目は本気で、全力で否定したがっているのが伝わる。

「あら、その手の事は国宝級に鈍い服部君にしては理解が早いわね」
「鈍いって何やねん！」

「あ、間違えた。“他人の恋路は分かっても、自分の事になるとさっぱりな”服部君にしては、か」

「ど・こ・が・や!! 探偵のオレが鈍いわけあらへんやろっ」

「その言葉、皆が聞いたら全員首を横に振るわね、絶対」

「そもそも探偵は関係ないと思うけどな、俺は……」そう呟く孝太郎の声は、平次の耳には届かなかった。

後日、孝太郎は香織に尋ねた。

「……で、結局あの会話は何やったん？」

「ああ。この前の和葉との約束、事件ですっぱかしたんだって」

「またかい……。それで？」

「『また和葉を怒らしてもうた。アカンとは理解しとるけど。でも……』って」

つまり平次のあの言葉は正確にはこういう事だ。

“——それでもオレは事件（を解決するん）が好きなんや”

「……アイツは事件が恋人かい」

「まあ、死神だし」

どうやら西の探偵の春はまだ遠いようだ……。

告白劇（後書き）

恋愛感情の無い男女の会話を書くのは好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595w/>

大阪は今日も平和です。

2011年12月20日10時51分発行